

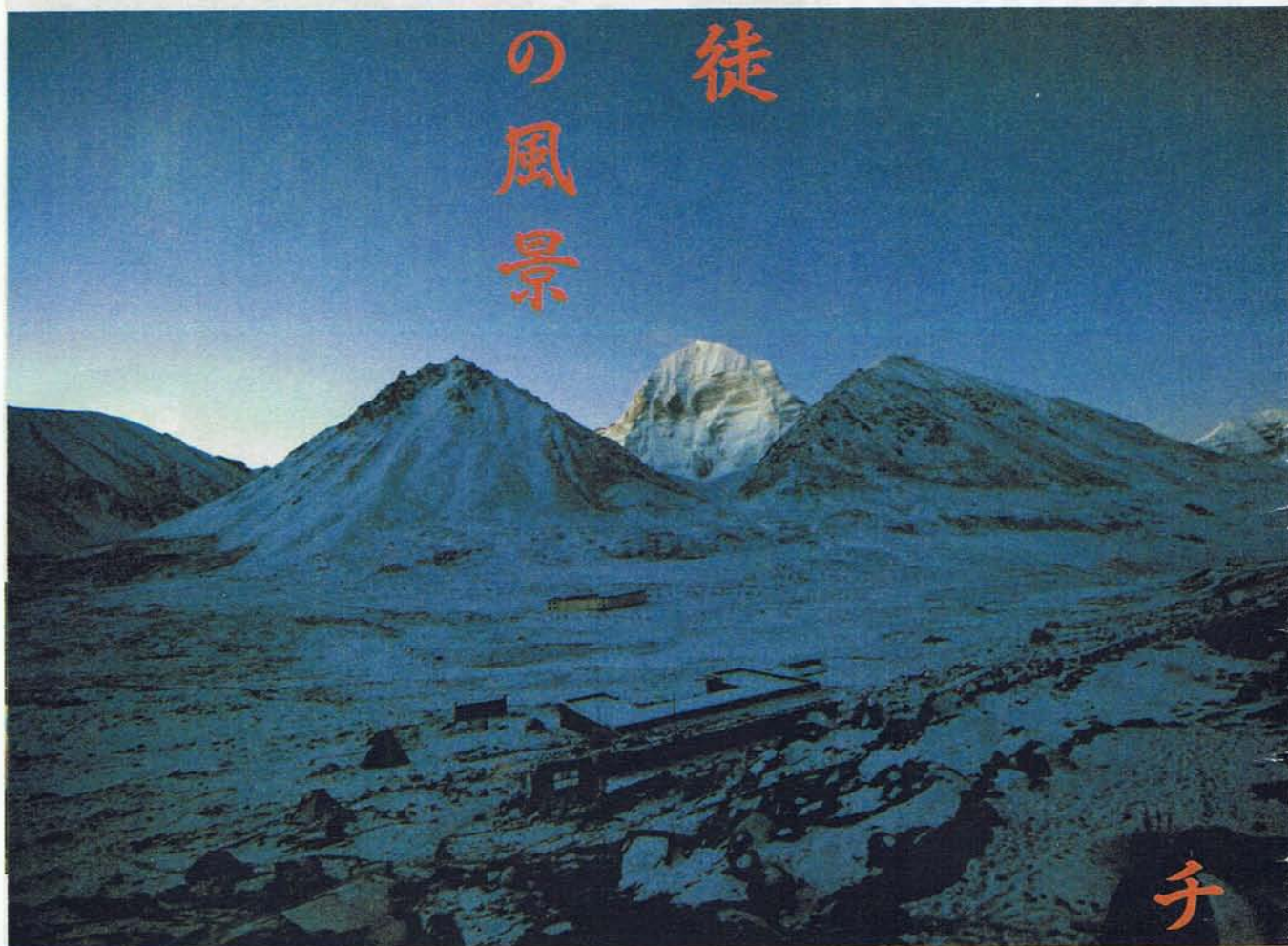
写真・文
近藤雄生

中国

異教徒

たちの風景

朝、目覚めると窓はかすかに光を採り入れ始め、闇は姿を潜めようとしていた。用を足すために寺院を出て階段を下り、木の門を開けたとき、体の震えが、寒さから感嘆によるものに変ったのが分かった。すべてが青く染まる中、カイラスの北面だけが、くっきりと真っ白く浮かんでいた。



チベット

五六の民族が共存する中国は、多数の異教徒たちが暮らす世界でもある。彼らは多様な中国の一部を成しつつ、それぞれ独自の文化や風習の中で生き続ける。中国西部で見たそんな異教徒たちの風景をレポートする。

足元の真っ白な雪原と、頭上の雲の間の、細い回廊を歩いているような気がした。標高五〇〇〇メートルではそれほど雲が近い。周囲には誰もいない。しかし、白い道を形づくる無数の足跡が、まるで天空にまで続くかのように、空と大地が合流する視界の先まで延びていた。

チベット仏教の聖地カイラスに、私はいた。六六五六メートルのカイラス山頂を取り囲む五〇キロあまりの巡礼路は、果てしないように思えてくる。十一月、気温はマイナス二〇度Cにもなるうか、立ち止まるとたちどころに体が凍えた。薄い空気と吹雪を伴った極度の寒さで激しく疲労しながら、半日かけて半周ほどを歩く。そして日没直前に、カイラスの北面を望む寺院に倒れ込むように辿り着いた。翌朝目覚め、日の出前に外に出た私は、目の前の風景に言葉を失った。真っ青な静寂の中に、

巨大なカイラスの頂のみが別世界の物体のように、真っ白に浮かび上がっていたのだ。

カイラスの山頂には、一世紀に吟遊詩人・修行僧であったミラレバが登ったという言い伝えがあるのみで、いまは聖地として登頂は許可されていない。それだけの山だからこそ、数知れぬ信徒が巡礼に訪れる。両手、両膝、額を地面につけながら進む「五体投地」という究極の方

法で、何年もかけてやって来るチベット人もいるという。

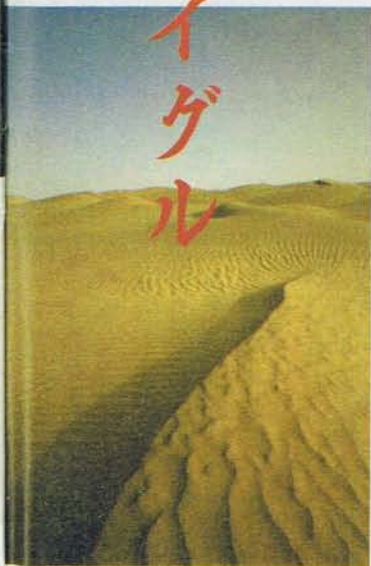
スイスに亡命したあるチベット人は、「カイラスを巡礼したとき、その神々しさに圧倒され、ダライ・ラマに会いに行くことを決めたんです」と言った。そして生まれ故郷の家族と永遠に離れることを覚悟で、歩いてヒマラヤを越え、インドのダラムサラへと向かった。

多くのチベット人は、カイラ

上/カイラス巡礼の途中に北面の寺院で休むチベット人。右/カイラスの巡礼路。道中、チベットを象徴する祈りの旗、タルチョがはためく。左/カイラスの麓の村タルチェンで暮らす漢族の任懐平さん(最左)と地元チベット人。



ウイゲル



ス南側の村タルチェンを日の出前に出発し、一日で巡礼路を一周する。私が北側の寺院で一泊した翌朝八時ごろ、早朝に村を出た巡礼者が次々と寺院に到着した。茶と主食のツアンパで一息つき、彼らは再び出ていった。

カイラス巡礼の出発地となるタルチェンには、一人の漢族の男がカイラスに魅せられて、住み着いていた。名を任懐平レンフワイピとつけた。任さんは、以前は北京の大学で教鞭をとり、自ら会社も経営していた。妻はドイツで大手電機メーカーに勤め、息子はアメリカに留学中という、まさに絵に描いたような中国上流階級の経歴の持ち主だった。

「縁があつて仏教徒になった」という彼は、二〇〇四年に初めてカイラスを訪れたとき、すべてを捨てて、ここに移り住むことを決めた。「カイラスにとっても強く魅せられたからだ」と任さんは言う。さらに、チベットの

孤児のために何かをしたかったのだ、とも。

だがその決断は、それだけの理由以上のものに思えた。私が訪れた〇七年一月、彼は、孤児院を建てる資金作りの一環としてささやかな宿を開き、四つの二段ベッドが所狭しと並ぶ一室で、旅行者とともに寝起きする生活をしていった。

なにが彼をそこまでさせたのかを聞こうとしても、任さんはただ、仏のような優しい笑顔を保ちながら、日々の雑事を坦々とこなし続ける。背後にはいつも、カイラスがそびえていた。

チベットにはそんな不思議な空気がいまも色濃く漂い続ける。中国に暮らす異教徒たちの中で、チベット人たちが世界的にも最も大きな存在感を示すのは、彼らのつむぎ出す風景が、あまりにも神秘的で、美しいからかもしれない。

チベット自治区の北に広がる新疆ウイグル自治区（以下、新疆）は、乾き切っていた。生と死がドタツと目の前に投げ出されたようなリアルな厳しさに満ちている。モンゴル高原の遊牧民族であったウイグル人がこの地に入りオアシスに定住したのは、九世紀のことである。

ウイグル人は、「シルクロード」の住民である。この道を通して、ものや文化が西と東に行き来するとともに、人間自身も混ざり合った。そして一六世紀末には彼らはイスラム教徒となった。ウイグル人の風貌には西方の匂いが嗅ぎ取れる。

東西一〇〇〇キロにもおよぶタクラマカン砂漠が、新疆の中央に広がる。アメリカカヤオーストラリアで見た、灌木やサボテンが生えるただ「荒涼とした大地」のような砂漠とは違い、一つの植物も生えず、風が描き上げた無数の大小のひだを持つ細かい黄金色の砂だけが茫漠と広がる。恍惚とする美しさと戦慄を併せ持った世界だった。

砂漠の南北は五〇〇キロ以上はある縦断道路でつながり、ウイグル人は砂漠の周辺や縦断道路沿いにも暮らしている。そんな砂漠南縁の町ニヤで、ウイグル人の大家族の家を訪れた。白アンのジャムとナン、そしてお茶という東と西が混じり合った香りのする食べ物で歓待さ



右下／タクラマカン砂漠。東西は一〇〇〇キロにも及ぶ。中／新疆ウイグル自治区の叶城の裏道で。左／シルクロードの要所カシュガルで、路上の床屋。



左／砂漠南縁の町ニヤにも、毛沢東の記念塔らしきものが建っていた。そこから少し離れた旧市街で、土でできた簡素な家を訪問すると、女性の多い大家族が、私たちを歓迎してくれた。写真を撮らせてほしいというと、老婦人たちは、二度とない機会とばかりに、頭の白い布を整え、姿勢を直し、うれしさと照れをとともににじませてレンズの方に顔を向けた。近くの写真屋でプリントしたものを持っていくと、興奮した様子で集まって眺め、それぞれ自分の顔を見て、おかしそうに笑った。



れ、家族は笑顔でこちらを眺め続けた。その中には誰一人中国語を解するものはいなかった。

ウイグルというと、北京五輪直前のカシュガルでの爆破テロが記憶に新しい。ウイグル人過激派による警官一六人殺害が中国全土を緊張させた。ウイグルもまた、チベットと同じく、中国が抱える最大の民族問題の渦中にあり続けている。

今年三月に中国政府は、ウルムチ（新疆の区都）で北京五輪攻撃計画を阻止するためとして、ウイグルの武装組織のメンバー二人を殺害し、一五人を逮捕したと発表した。同じく三月、チベットの騒乱で世界が騒然となっている最中、新疆の和田市で、ウイグル人の商人が拘束中に残酷な拷問を受けて死亡したことなどに対してのデモが起こり、五〇〇人以上のウイグル人が逮捕されたという報道が出た。しかし情報は厳しく統制され、和田の警察当局はそれを全面的に否定しているため、実際に何が起きたのかは分からない。

米国に住むウイグル人の人権活動家ラビア・カーデルさんは、ウイグルの人権問題と戦う象徴的な存在で、ノーベル賞候補ともなったが、チベットのダライ・ラマに比較すれば、名の知れた存在とはいえない。彼女は、九九年に不当な罪で投獄され、〇五年に釈放された後、米国に亡命した。が、いまは彼女の二人の息子が身柄を拘束されている。彼女の訴えに耳を傾け、ウイグルで何が起きているのか、国際社会はもっと注視する必要がある。

ただ、新疆でウイグル人と接していると、そんな問題にはほとんど気づかされない。人々は平和に暮らしているように見え、家に招いてくれた老人も、貧し



ラマダン明けの日、〇万人以上の回族が青海省・西寧のモスクに集まる。

回族

くともとくに生活に不満はなく、平穏な日々で満足していると話した。ただ、見ず知らずの私に対して、「政府がよく助けてくれる」としきりに繰り返した彼の言葉をどう解釈していいのかわからなかった。

中国でイスラム教を信仰するのはウイグル人だけではない。五五の少数民族のうち一〇がイスラム信仰を持つとされている。その中でも最も数が多いのが回族である。

シルクロードが賑わった時代、陸海を通じて中国にイスラム教が伝わった。そして、中華人民共和国の時代に入って、イスラム教を信仰する人々として「回族」という少数民族が認定された。

回族は、容貌では漢族とは区別はつかず、特定の言葉なども持たない。つまり基本的にはイスラム教を信仰するという一点のみで一つの民族と分類されている。

中国とイスラム教の関係は、歴史が長い。社会主義の中国では信仰の自由は建前上認められていて、改革開放が始まって以降、ここ三〇年弱の間にその自由はかなり増した。チベットや

ウイグルのような独立問題が絡まない回族は、イスラム教徒としての生活を自由に謳歌しているように見える。

中国を東から西に移動して、回族の世界に來たと感じたのは、甘肅省臨夏回族自治区に入ったときのことだった。イスラム教国のモスクを思わせる滑らかな丸い屋根と中国の寺の骨格が組み合わされたような不思議な形の寺院が現れはじめた。それこそ清真寺、すなわち中国のモスクである。また、人の顔や言葉にはほとんど変化はないものの、男たちの多くが小さな白い帽子をかぶっていた。それがイスラム教徒である回族の証であるようにも見えた。

人々は清真寺に行つて祈る。豚肉の代わりに羊肉が使われる。しかし、人々の雰囲気はほとんど漢族と変わらない。

ラマダンが明ける日、私は青海省の省都・西寧にいた。西寧には東関・清真大寺という青海省最大規模のモスクがあり、毎年この日には、中国全土から多くの回族が集まってくる。その数、ある年には一三万人におよんだという。

○七年その日、一〇月二二日のモスク前大通りは、一キロほどにわたって通行止めとなり、朝八時ころにはすでに、視界の果てまで白い帽子のイスラム教徒の男たちで埋まっていた。お



甘肅省臨夏は回族の自治州である。省都・蘭州から2時間半ほどの臨夏にバスで向かうと、途中から道ゆく人はみな回族となっていく。男たちの白い帽子によってそれは分かる。「臨夏だけで300~400の清真寺(モスク)がある」とタクシーの運転手が言った。確かに、細い路地にもいくつものモスクがあった。大通り沿いのモスクでの昼の礼拝を見に行くと、集まった人の中に一人の小さな男の子がいた。誰と来ているという風でもなく、またもちろん真剣に礼拝に來たというわけでもなく、ただその場にふんわりとたたずんでいるといった様子だった。少し物憂げな顔でこちらを見つめたあと、礼拝が行なわれている本堂の前へと階段を上り、ひとり靴をさわって過ごしていた。毎日モスクに來るのがすでに彼の習慣なのかもしれない。その目的はまだ分からずとも。

そらく一〇万人は下らない。それぞれ絨毯を敷き、遠くメッカの方向に頭をきれいに並べ、歩道、路地裏、ホテルのロビーなど、あらゆる場所に、男たちは空間の限界に挑むように座っていた。その一〇万人が一斉に祈り、同時に頭を地に付けて静まりかえると、一帯の時間が止まり、目の前の一切のものが凍り付いてしまったように見えた。

座り、立ち、頭を垂れ、耳の後ろに手を当てる。祈りの言葉とともに、一時間ほどそんな動作を繰り返した。彼らが一斉に立ち上がると、見渡す限りの白い帽子たちがそれぞれ自由に動き出し、モスクからも、大量の男たちがなだれ出てきた。そして、ある者は談笑に花を咲かせ、また別の者は日中堂々と食べられる喜びを胸に、小さな食堂へ

と急いだ。

余りにも多様な中国西域の光と影

中国では、憲法で宗教信仰の自由が保障され、仏教も、道教も、キリスト教も、イスラム教も存在し、活動を認められている。なんらかの宗教を信仰する人は一億人いるといわれている。ここに挙げた三者はそのほんの一例に過ぎない。

ただ中国で認められているその自由には、政府の指導・監督に従うという制約がつく。従わない宗教は邪教として、弾圧の対象となる。

信仰する宗教は民族によって異なり、多民族国家である中国の宗教政策は、自然に少数民族政策とも強い関係を持つ。なかでも、独立問題を抱えるチベットとウイグルには、中国政府は警戒を緩めない。チベットもウイグルも、弾圧によって多大な人権侵害が行なわれていることは否定しがたい。

ただ、チベットやウイグルで起きている人権侵害のすべてをチベット・ウイグル固有の問題として捉えるのは正確ではないだろう。たとえば、ダライ・ラマのいう「文化的虐殺」という言葉は、多少一方的に聞こえる。中国政府がチベットやウイグルの開発を進め、インフラを整備し、多くの漢族が移り住むよう

になる背景は、決してそれだけではない。チベット人・ウイグル人にとっても、現実的に考えれば道路や鉄道の整備は必要だし、それは両自治区が中国の一部であるという現状を考えれば、政府の意図とはまた別の当然の成りゆきとも言えるのだ。

どこまでがチベット・ウイグル固有の問題で、何が中国全般の問題なのか。それを区別するのは容易ではなく、その解釈は立場によって違ってくる。人権侵害は中国全土の問題でもあるからだ。

もはやチベット問題もウイグル問題も、その地域だけの論争点ではなくなった。チベットを語ることはその人自身の政治的スタンスを物語るといっても過言ではないほどに、個人々の持つ背景によって善悪が見事に逆転する。

今年三月、日本でも、中国を嫌う人々がまさに嫌中という理由でチベットを支持する一方、親中派や人権派は、激しい人権侵害が起きている可能性が高いにもかかわらず、口をつぐんだように見えた。それは対立を深めこそすれ、解決には導かない。中国の異教徒たちが織りなす風景は、この国の多様さを改めて気づかせる。そしてそこに、無数の光と影があることも。

こんどう ゆうき・ルポライター。